

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 土屋 美子

本論文は、15世紀イタリアの文人アンジェロ・ポリツィアーノ(1454-1494)が俗語(イタリア語)で執筆した韻文作品『スタンツェ』、『オルフェーオ』、『リーメ』を取り上げ、作品成立の文化史的背景をも視野に入れつつ、主として言語上の特徴の分析を通して、それらの作品がイタリア語史上で果たした役割を解明しようとしたものである。

第1章「俗語再生の道程とポリツィアーノ」では、15世紀フィレンツェにおける俗語人文主義を推進し、ポリツィアーノの俗語作品執筆にも深く関わったロレンツォ・デ・メディチの言語観について考察し、前者の作品との関連について論じている。また、ポリツィアーノの作品にみられる民衆語法や諺の摂取について検討を加えている。

第2章「先行作品からの摂取にみられる多様性」では、作者が古典や先行する俗語詩から着想、語彙、技法などを自己の作品に縦横に取り入れた実態について検討しつつ、ポリツィアーノの創作理論「博識ある多様性」(*docta varietas*)が作品中でいかに実践されているかを例証している。

第3章「動詞形態にみられる多様性 (I) 一直説法・条件法」および第4章「動詞形態にみられる多様性 (II) 接続法」では、作品に用いられた動詞の語形に着目して定量的分析を行い、形態論的側面から作者の語形選択の意図を解明しようとした。

ポリツィアーノの使用した動詞形態には、1)14世紀の三大作家らが用い、後にピエトロ・ベンボ(1470-1547)らにより規範的な形態とみなされることになる伝統的な語形、2)ポリツィアーノの時代にトスカーナで普及していた1)以外の語形、の2系列の形態がみられる。土屋氏は、こうした動詞形態について詳細な検討を加えた結果、直説法においては全般的に2)の系列の形態が優勢であること、一方、接続法においては、時制により作品により優勢な形態の系列が異なることを明らかにしている。そして、語形選択に際して作者が韻律上の要請に加え、同時代の読者にとっての理解の容易さと伝統的な詩的言語に連なることの効用をともに考慮していたことを指摘している。

第5章「韻律にみられる多様性」では、『リーメ』と『オルフェーオ』にみられる韻律について検討を加え、多様な韻律で構成された後者のテキストにはオペラに繋がる要素が内在していると指摘し、イタリア語に新たな展望が開かれたことを示唆している。

本論文は、動詞の形態を論じた第3章および第4章と、他の章とのあいだで論述の手法に一貫性が欠けていること、とくに第1章および第2章において先行研究の調査ならびにその提示方法に不足や問題がみられることなどの不備はあるが、第3章ならびに第4章で行った多様な動詞形態に関する詳細な検討は、ポリツィアーノの俗語作品の解明に新たな知見をもたらしたものと高く評価できる。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するのにふさわしい論文であると判断する。